

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370824

研究課題名(和文) サラワク・シブにおける華僑社会の形成と変容、対日歴史記憶に関する総合的研究

研究課題名(英文) The formation and change of Chinese Society in Sarawak Sibu and their historical memory about Japanese occupation in the Second World War period

研究代表者

山本 真 (YAMAMOTO, Shin)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20316681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：日中戦争前期(1937 - 1941)、中国からの短波ラジオ、教科書、抗日宣伝雑誌、映画、歌曲などを通じて、サラワク華僑に対して、民族意識や祖国の抗戦が宣伝された。これに応え、華僑は救国義捐金運動を展開した。

太平洋戦争時期(1941 - 45)には、サラワクは激戦地とはならず、華僑を含む現地住民への大規模な虐殺は概ね発生しなかった。しかし、日本の軍政は「ピンタ」や犯罪容疑者に対する酷刑などにより威圧の様相を強く呈した。また、資源の収奪、既存の流通網の寸断、統制経済は、民生を混乱に陥れた。中国から注入された抗日戦争のイメージと太平洋戦争での経験が複合することにより、華人の対日歴史記憶が形成された。

研究成果の概要(英文)：In Sino-Japanese War period, The Chinese people in Sarawak received anti Japanese propaganda which were dispatched from mainland China to bring up the nationalism of oversea Chinese. As a result of this, Chinese people in Sarawak organized a fund which was established to raise money helping for Chinese government to fight against Japan. In Pacific War period, although the Japanese army occupied Sarawak, organized massacre did not happen. Because, there were not strong resistances by defense army and local peoples.

In spite of this fact, The administration by Japanese government was severe for local peoples. Because, Japanese soldiers often slapped local peoples when peoples did not bow to them. And if criminals were caught, they were punished very cruelly. The Japanese economical administrations, for example exploitation of local resources and manpower, destruction of distribution channel made by former British empire, plunged the life of local peoples into a difficult situation.

研究分野：中国近現代史

キーワード：華僑 サラワク 歴史記憶 日本軍 中国

1. 研究開始当初の背景

日本にとって東南アジアとの関係が戦略的重要性を増しつつある今日、当該地域において少なからざる影響力を有する華僑・華人の中国との繋がり、対日感情を歴史的に検証することは重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究では、東マレーシア(ボルネオ島西北部)サラワク州シブの華人コミュニティを主要な調査対象とした。そして、移民社会の形成と変容、日中戦争期における対中援助(抗日義捐金運動)、日本軍による占領の実態、そして対日歴史記憶を現地調査に基づき考察した。また、シブには華人以外にマレー人やイバン族も居住している。先住民と華人との関係を確認するとともに、日本の統治に関わる歴史記憶についても、華人のそれと比較検討した。

3. 研究の方法

近代中国福建省の地域社会史を専門とする山本、客家・華人の女性史研究を専門とする飯島、そしてマレーシアの少数民族研究を専門とする文化人類学者の三浦が密接に協力して、学際的な研究体制を構築した。方法的には歴史学(文庫学)と文化人類学(フィールド調査)を融合し、現地での史料収集と聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 科振による招聘でのワークショップの実施

黄娟娟氏(マレーシア、サラワク州シブ市メソジスト神学大学院)報告テーマ「サラワクにおけるキリスト教と民間信仰の関係」、2013年12月1日、筑波大学東京キャンパス。

国際ワークショップ「中国僑郷と東南アジア移民先社会研究に関する双方向的視座 福建省福州・金門;サラワク・シンガポールの事例から考える」、2014年11月9日、筑波大学東京キャンパス

マレーシアからの招聘報告者

Dr. Elena Gregoria Chai Chin Fern (Senior Lecturer, Department of Anthropology and Sociology, Faculty of Social Sciences, University Malaysia Sarawak

Title: Sarawak Chinese Folk Religion :TuaPekKong

国際ワークショップ「東マレーシア・サラワク華人社

会への現地調査に基づく多角的アプローチ - 歴史学と人類学の視座から - 」,2015年12月5日、筑波大学筑波キャンパス

マレーシアからの招聘報告者

Dr. Elena Gregoria Chai Chin Fern University Malaysia Sarawak

Title: Community Allegiance to Temple: Chinese "Communities" in Sarawak

黄孟礼氏、砂朥越僑理華人年議會文書部・砂朥越華族文化協会歴史組

タイトル: 詩巫華人歴史研究的一些厘清

(2) 研究代表者山本担当部分

山本による現地調査は次のとおりである。2013年9月サラワク州シブ市内、2014年3月サラワク州クチン市およびその周辺、2014年8月サラワク州シブ市及びクチン市、2016年2月から3月シブ市及びピット市。研究内容<日中戦争前期、サラワク華僑の救国献金運動>について

華人の対日感情を理解するためには、民族意識が高揚したと見なされる日中戦争前期の救国献金運動や、太平洋戦争時期の日本軍占領下での華僑の境遇について検証することが必要になる。この関心に立ち、日中戦争前期に実施された救国献金運動である「籌賑祖國難民運動(祖國の戦争難民を救済する運動)」(以下では「籌賑運動」と略記する)を検討した。「籌賑運動」では、愛国心・民族意識を喚起する宣伝を通じて戦争難民を救済する募金が行われた。

サラワク、特にシブでは、「籌賑運動」の時期に、中国からの短波ラジオで戦況を受信することをニュースソースとして華字新聞が発行された。また、中国からの教科書、抗日宣伝雑誌や画報、映画、歌曲の受容を通じて、中国民族意識や祖國中国の抗戦が宣伝された。新式メディアを利用して、中国から「祖國の表象」が注入されたと言える。そして、都市部の有力商人やキリスト教会の指導層、教育界の人々がこの「祖國の表象」を受容した。なお、本稿で検討した「祖國中国」は、残虐な国家(日本)から侵略を受け、滅亡の危機に瀕する一方で、強大な敵に果敢に抵抗する主体として表象された。そして、黄帝の子孫たる中国人は祖國の「救亡(滅亡の危機を救う)」に努力を惜しんではならないと宣伝されたの

である。

<太平洋戦争での日本軍の占領>について

太平洋戦争において、サラワクは日本軍に占領された。しかし、連合軍の抵抗が弱く、激戦地とはならなかったこともあり、華人を含む現地住民への大規模な組織的な虐殺は発生しなかったと言える。ただし、日本の軍政は一般民衆に対する「ヒンタ」や犯罪容疑者に対する酷刑などにより、威圧的・暴力的様相を強く呈してしまっただけでなく、さらに、現地の資源収奪、既存の流通網の寸断、統制経済の導入は、現地住民の民生を混乱に陥れたのである。総じて、日本軍による統治は、現地華人に強圧的なものとして強く記憶され、戦争終結後も語られ、記述され続けるなかで、ステレオタイプと化して現地の歴史認識を形成したと言える。

(3) 研究分担者飯島典子担当

飯島による現地調査は次のとおりである。2013年8月から9月サラワク州シブ市、2014年3月サラワク州クチン市、2014年9月サラワク州クチン市、2015年9月サラワク州シブ市、2016年2月サラワク州シブ市。研究内容<戦時下の華人女性史>

飯島の担当は主に女性の生活面から当時の社会を明らかにすることであり、戦時下の混乱・変遷を知るために女性の服飾についての变化からこの課題に取り組んだ。

当初は戦時中の生活について、当時を知る女性を中心に聞き取り調査を進めていたが、食料に困ったこと、日本兵を恐ろしく感じたこと(台湾人日本兵の存在もあって時間が経つにつれて恐怖心が和らいでいった、という経験談もあった)など生存者からの話はそれなりの歴史の貴重な口述資料ではあり得たが、日本占領下における他の東南アジア地域での体験談とさして変わりはない。そこで特に女性ことでの「無言の言語」とも言うべき服飾から戦時中の変化を追ってみることにした。

日中戦争時期(太平洋戦争開始以前)大きな服装(履き物も含む)のスタイル変化は起こっていない。経済的に裕福な女性ことでの戦時下の「仕事」は寄付金を集めるための慈善パーティ出席などであり、チャイナドレスはまだまだ健在で、戦時下の緊張による機能化の様子を見せていない。ただ彼女達の服装は大きく2通りに分けられる。裕福な階層の場合あくまで「華人女性」とし

てチャイナドレスを着て抗日義捐金を集める慈善活動に参加しており、一般の女性共纏(サン・フーブラウスとズボンという意味、中国式ソーピース)と呼ばれるやや種族的な服であったが、生地の手入が困難になったこと以外にデザイン上の変化は起こっていない。

しかし、日中戦争、1941年以降は日本軍の占領により、深刻な物資不足とりわけ衣料品不足にみまわれることになった。管見の限りマレーシアにおける衣料、繊維産業史は専ら工業史の、それも先住民の工芸としての研究対象であり、戦時下の物資不足という社会的側面からはあまり注目されてこなかった。今回の調査で、華人女性が衣料の不足に際して如何なる代替の繊維を創ろうとしていたかについても資料が乏しく、戦時中におけるサラワク華人女性の被服生活及びその苦難を十分解明出来たとは言えないが、女性の戦時中における苦難を知る上で、「非言語の記憶」とも言うべき衣料の変遷についてはこれからも注目してゆきたい。なお、今回の調査は専ら聞き取りと当時の写真から行ったもので、華人社会において女性が殆ど自らの記録を残していない事実を改めて考えさせられた。

ところで、現在のマレーシア全体では華人は人口の26%を占めるに過ぎないが、マレー半島と異なり華人人口がやや大勢を占める東マレーシアではマレーの服飾文化との融合が見られるようになったのは管見の限りマレーシア独立以後の1960年代になってからのことである。

(4) 三浦哲也担当部分

三浦の本邦研究における役割は、イバン族を中心とするサラワク先住民の日本軍政期に対する歴史認識や対日感情について、また同時期のサラワク先住民と華人住民との間の民族間関係についての調査研究である。主な調査時期と調査地は以下の通りである。2013年9月サラワク州シブ市内、2014年3月サラワク州クチン市およびその周辺、2014年9月サラワク州シブ市およびカノウット郡、2016年3月サラワク州ラワス省。研究内容<サラワク先住民の日本軍政に対する歴史認識と対日感情>

上記調査地において、主に日本軍政期の様子を知る高齢者に対して聞き取り調査を行った結果、確認されたのは、以下のような内容である。まず、日本軍政下にお

いてイバン族は特に暴力的な支配や虐殺などを受けることはなかった。イバン族も特に日本軍に対して強い敵意を持つようなことや、組織的な抵抗運動などはなく、比較的に穏健な軍政統治が行われていた。しかしながら、カノウィット市街地に居住していた複数の高齢の華人からの聞き取りでは、日本兵は反抗的だったり軍の要求を受入れなかったりする華人には、容赦なく殴る蹴るの暴行を加えるなどした。華人住民に対しては、威圧的・暴力的な支配と日常的な迫害が行われていたことは事実である。

また、サラワクにおける日本軍政は、既存の流通網の破壊や食糧の強制的買取りなどによって経済を混乱させた。当時、自給的な生業経済に依拠するところの多かったイバン族は、そのような経済の混乱によって致命的な影響こそ受けなかったが、一部では食糧不足などが引き起こされた。

イバン族と華人との民族間関係については、今回の調査対象であったカノウィット郡においては、そもそも日本軍政以前から良好で、個人的な交友関係をもとに、困窮する華人をイバン族が助けるというケースが多々あったものと考えられる。

ラワス省での調査では、当時を知る老人たちにとって日本軍政に帯する印象は、シブ付近と比べると、かなり希薄である。それは彼ら自身が当時ほとんど日本兵を見ておらず、当地での軍政の実務担当者が、現地で日本軍に採用されたイバンやメラナウといった先住民下級官吏であったことに起因していると思われる。また、現地住民の日本軍政に対する印象は、各地の軍政担当者の個人的なキャラクターに大きく左右されていることも示唆された。これは、軍政を担当した北ボルネオ守備隊はわずか800名ほどで、担当地域の面積に対して極めて希薄だったことに起因すると考えられる。

(5) 全体の成果

3人の研究者による3年間の現地調査により、マレーシア・サラワク州の華人及び先住民（イバン族）による日中戦争・太平洋戦争時の対日歴史記憶について多方面から検討を進め、次の知見を得ることができた。日本軍によるサラワク占領は、現地での抵抗が弱かったこと、占領軍が小規模であったことなどにより、大規模な虐殺が行われることはなかった。ただし日本軍の統治は威圧

的で過酷なものであるとの印象を華人や先住民に強く与えるものであった。さらに地味経済を大いに話しさせ、民生を話しさせてしまった。このような歴史記憶が、特に華人にあっては、現在においても日本に対する嫌悪が持続している大きな要因になっていると指摘しなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究担当者及び連携研究者に下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

三浦哲也、イバン族の日本軍政に対する記憶と認識：サラワク州・シブにおける調査から、『育英短期大学紀要』査読なし、32号、2015、73-82頁。

山本真、20世紀前半、福建省福州、興化地区から東南アジアへの移民とその社会的背景 キリスト教徒の活動に着目して、『21世紀東アジア社会学』査読無し、第6号、2014、31-47頁。

山本真、東マレーシア・サラワク華人社会と日中戦争・太平洋戦争 サラワク州クチン・シブでの調査記録 『中国研究月報』査読無し、68巻5号、2014、38-49頁。

〔学会発表〕(計4件)

飯島典子、東南アジア客家人のアイデンティティ - 日本の南鮮略との関係、2016年2月20日、サラワク華族文化協会、マレーシア・シブ市。

山本真、日中戦争前期、サラワクでの「華僑難民国難民運動」における祖国・中国の表象と種加の実態(1937-1941) 国際ワークショップ「東マレーシア・サラワク華人社会への現地調査に基づく多角的アプローチ - 歴史学と人類学の視座から - 」2015年12月5日、筑波大学筑波キャンパス(東京都文京区)。

三浦哲也、日本軍政の記憶 - イバン族とドゥスン族の比較から -、国際ワークショップ「東マレーシア・サラワク華人社会への現地調査に基づく多角的アプローチ - 歴史学と人類学の視座から - 」2015年12月5日、筑波大学筑波キャンパス(東京都文京区)。

山本真、20世紀前半、中国福建省からサラワクへの移民とその歴史・社会的背景：二十世紀上半葉、由中國福建省到砂朥越的移民及其歷史・社會背景、2014年11月9日、筑波大学東京キャンパス(東京都文

京区)

〔図書〕(計 2 件)

吉原和男編『華僑・華人の事典』丸善出版 2017 年刊
行予定、山本真分担：東マレーシアへの福州人キリスト
教と入植者、印刷中。

関根謙編著『表象の中の近代中国』平凡社 2016 年刊
行予定、山本真分担：日中戦争前期 サラワク華僑の救
国献金運動における祖国・中国の表象と活動の実態
(1937 - 1941) 印刷中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 真 (YAMAMOTO, Shin)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20316681

(2) 研究分担者

飯島 典子 (IIJIMA, Noriko)
広島市立大学・国際学部・准教授
研究者番号：40552162

三浦 哲也 (MIURA, Tetsuya)
育英短期大学・現代コミュニケーション学科・准教授
研究者番号：80444040